

## 物理工学系

教員数	教員等数 (人)	教授 15 (15)	助教授 10 (11)	講師 16 (17)	助手 5 (4)	技官〔準研〕 - (-)	
	異動状況 (人)	退職・転出 2 (4)	昇任 2 (4)	採用 1 (3)	学内 - (-)		
研究活動	研究発表 (件)	論文・著書発表数		学会発表数			
		国内	国外	国内	国外		
	54 (43)		196 (228)		299 (347)		
	受賞数	1 (3件)					
	研究費等	採択件数		採択率(%)	金額(千円)		
		科学研究費		22 (22)	56.4 (52.3)	139,700 (101,600)	
		学内プロ		9 (10)	45 (40)	7,800 (5,699)	
奨学寄附金件数・金額		21件	26,342千円	(24件	39,540千円)		
受託研究件数・金額		11件	41,893千円	(7件	110,022千円)		
受託研究員		1人 (人)					
施設・設備							

・( )は前年度の数値を示す。

### 1 物理工学系の活動

学系再編後、4年が経過し、学系教員の研究分野の融合と協力体制が整備されて来た。

本年度から学内特別プロジェクト「ナノサイエンス」がスタートし、本学系からも主要メンバーとして参加している。加えて、「21世紀COE研究プログラム」も年度半ばから始まり、物質工学系、化学系と協力してプログラムを推し進めた。更に、「学際物質科学研究センター」の立ち上げに尽力し、次年度から発足の同センターの主要協力学系として参加することになった。光・半導体デバイス関連研究や医療計測診断装置の研究では、昨年度に引き続き外部資金の導入が活発に行われた。科学研究費等の競争的研究資金の導入も「基盤研究(S)」を獲得するなど、比較的順調で、着実に研究成果を上げた。国内外の研究会や国際会議への招待講演も多数見られた。

### 2 自己評価と課題

学類再編に伴う学系再編が実施されてから4年目をむかえ、学系構成教員と大学院修士課程および博士課程の研究分野がほぼ対応するようになった。その結果、学類教育・大学院教育および研究の系統的な活動が可能になった。特に、学系や大学院のセミナー等では、従来に比べ幅広い分野の研究発表に接する機会が増え、学系再編の成果が出始めている。活発な研究活動の結果、外部資金の獲得が比較的順調に推移したので技官室の共通設備の充実を計り、研究支援体制に厚みを増すことが可能になってきた。

次年度以降は、新博士課程研究科の専攻を中心にした研究プログラムを初め、学内プロジェクトおよび新研究センターが併行して活動するので、バランスの良い研究計画と実行が課題になる。

人事面では、学系再編の影響を考慮して物質工学系と協力して進めている。当該年度は、定年等を含め、2名の講師が退職し、1名の助教授、2名の講師、1名の助手が転出した。その補充人事は内部昇格と公募の実施によって進めた。年度末の欠員が2名あり、新しい分野を含めた早急な補強が課題である。